

いちのみの芸術文化

ICHINOMIYA Arts and Culture Association

■ 特集『三岸節子が描いた貴重な肖像画』

■ 『エッセイ』私の好きな芸術家

洋画部門 一宮美術作家協会／洋画部 井上雅夫

■ 第77回一宮市美術展(報告)

■ 文化講演会(報告)

■ 一宮市芸術祭アルバム
■ これからの催し

東京都中野区鷺宮のアトリエにて、三岸節子(左)と
肖像画のモデル・貝谷八百子(1957年頃)
写真提供:三岸太郎氏 ©MIGISHI

2019.12

第50号

一宮市芸術文化協会

「一宮市」には、一宮市博物館・一宮市三岸節子記念美術館・一宮市尾西歴史民俗資料館など先人の残した文化を紹介する施設があります。私たちの「身近な文化」を学んでみませんか？

三岸節子が描いた

貴重な肖像画

「裸婦を描くにしてもコスチュームを描くにしても、対象が生き物だといふことがまだ気がかりです。静物のやうに静かに黙つてゐてくれない。生きた動物は困るのです。まして相手に気兼ね、気苦労をするやうではなほさら厭。動勢、気配をうかがふのに神経を使ふのが厭なのです。わたくしといふ人間は人並外れたエゴイストです。」^(注1)

エッセイの中でこのように語る節子は、その言葉通り人物を描くことはほとんどありませんでした。そんな節子の貴重な肖像画が、二〇一七〜二〇一九年にかけて四点相次いで当館に収蔵されました。

三岸節子の画業

節子の画業を、一九五四(昭和二十九)年から約一年半の渡欧経験を経て概観したとき、前半は室内画・静物画、後半は風景画に大別することができます。



初期の室内画《室内》(1939年) ©MIGISHI



晩年の風景画《アルカディアの赤い屋根
(ガチスにて)》(1988年) ©MIGISHI

一九二二(大正十)年、十六歳で画家を目指し上京した節子。二十歳で画家・三岸好太郎と結婚し三人の子をもうけましたが、好太郎の急死により二十九歳でシングルマザーとなります。幼い子どもたちの育児や家事に追われていたこと、また節子自身先天性の股関節脱臼を抱えていたことから気軽に外を歩くこともできず、この頃はアトリエの中で身の回りの喜ばしいものをモチーフに室内画・静物画を描いていました。



右)バレリーナ・貝谷八百子を描いた第7回表紙コンクール参加作品(1957年)
左)歌手・浜村美智子を描いた第8回参加作品(1958年)



©MIGISHI

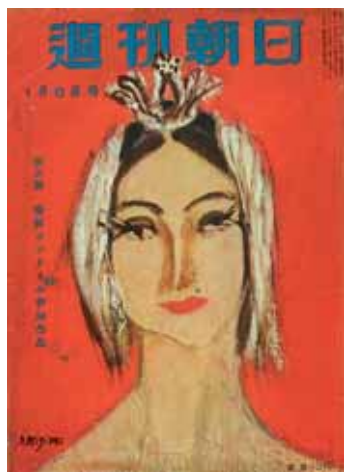
『週刊朝日』表紙コンクール

すでに二十三歳となり一足先にパリに留学していた長男・黄太郎の運転によりヨーロッパ各地を巡り、風景を描く魅力に目覚めました。その後一九六八(昭和四十二年)に黄太郎一家とともに二度目の渡仏を果たし、二十年余りの滞在を経て風景画家として確固たる地位を確立しました。

こうして俯瞰したとき、人物というモチーフは節子の画業には登場しません。

一九五一(昭和二十六)年に始まり、一九五八(昭和三十三年)の第八回まで続いた『週刊朝日』表紙コンクール。毎年小磯良平、東郷青児など名だたる画家たちが十五週にわたって週替わりで表紙を飾り、原画が読者プレゼントされました。節子は女性作家として唯一人の参加となった第一回を皮切りに、第四回、第六〜八回と、小磯らとともに最多の計五回表紙を飾っています。

第四回からはテーマが設けられ、第六〜八回のテーマは「日本の女性」でした。節子が公に肖像画を制作した記録が残るのは



右)バレリーナ・谷桃子を描いた第6回参加作品が表紙を飾った『週刊朝日』1956年1月8日号
左)谷桃子の肖像画習作(1956年) ©MIGISHI

この三回だけです。当館は二〇一七年に第七回参加作品、二〇一八年には第八回参加作品を、当選者やその遺族から寄贈を受けました。第六回参加作品は所在調査中ですが、人物の背景に鮮烈なオレンジ色を採用するあたり、カラリストと呼ばれた節子の色彩感覚が肖像画にもいかに発揮されていることがわかります。なお、第六回参加作品の習作にあたるデッサン画は、当時アトリエを構えていた東京都中野区鷺宮で節子一家のかかりつけ医を務めていた医師宅で発見され、二〇一九年に寄託を受けました。

表紙コンクルールの時代背景

一九三四(昭和九年)の夫・好太郎の死後、画家として生きる決意を新たにした節子は、雑誌や書籍の表紙絵や挿絵、講演、随筆など、依頼があればなんでも引き受け、生計の足しにしていました。とくに表紙コンクールが開催された一九五一〜一九五八年前後は、週刊誌の創刊ラッシュの時期でもあり、節子は各誌で表紙絵や挿絵を描いています。表紙コンクールはちょうど画風の転換期たる初渡欧をまたぎ、初めて肖像画がテーマとなった第六回(一九五六年)は帰国後最初の参加でした。当時の心境について節子は「人物をもっとも不得手としながら、

ついにフティにも描く側になりました。」「『週刊朝日』一九五六年一月八日号」と自虐とユーモアを交えて語っていますが、ヨーロッパで刺激を受け、新たな挑戦に心を燃やしていたのではないのでしょうか。

最初期の肖像画

当館は二〇一九年、節子とプライベートな親交があった方が制作を依頼したという肖像画を、その方の親族から寄託を受けました。一九三〇年代、節子が三十歳前後の頃の作と推定される同作品は、表紙コンクール作品と比べるとまだ拙く、節子らしさをそこに見出すことはできません。ほとんど描くことがなかった肖像画も、年を重ねるとともに洗練されていることがわかります。



個人を描いた肖像画(1930年代) ©MIGISHI

(二宮市三岸節子記念美術館 長岡 昌夫)
注1 三岸節子『花より花らしく』一九七七年、求龍堂、十六頁

私の好きな芸術家

洋画部門 一宮美術作家協会／洋画部 井上 雅夫

美術の表現を続けて四〇年近くになる。美術教師としても人生の半分以上を生きてきたので美術のことを多少は分かっていると言いたい所だが、まだまだ道半ばというのが正直な感触である。この長い道のりを導いてくれるお手本とも言うべき先達が多くいるので、この機会に思いつくまま紹介してみたいと思う。

≪アンリ・マティス

(Henri Matisse) 一八六九～一九五四

美術史の中から一人だけ芸術家を挙げると言われたら迷いつつもマティスはまず頭に浮かぶ人である。表現に向き合う姿勢とか作品の成り立ちは非の打ち所が無く、特に素晴らしいのは純粹に絵画的であることだろうか。彼の作品の良さを言葉で十分に表現することが非常に難しく、それだけ絵画の中でしか成り立たない世界を、絵画ならではの方法で、しかもさり気無く、抜群のセンスでまとめる手腕には脱帽するしかない。紙面



マティス設計『ロザリオ礼拝堂』
(1951年フランス) 撮影井上

の都合で詳しく書けないのが残念だが、彼が最晩年に病気で入院した時、絵が描けないという状況でも「切り紙絵」という新しい手法で制作を続け、独自の世界をさらに大きく創出した事実を見るにつけ、怠け癖に負け続ける私自身にとっては間違いなく師と仰ぐべき存在となっている。マティスが同じく晩年に設計・デザインした南仏ヴァンスの教会に行ったことがあるというのは私の自慢の一つである。

≪ルイス・バラガン

(Luis Ramiro Barragan Morfin)
一九〇二～一九八八

私は建築的な空間を題材にした絵をよく描いているけれど建築を専門的に学んだ経験は無く、ただずっと「建築という表現」には興味を持ち続けていて、それが高じて自身の表現に繋がっている訳だが、それだけに好きな建築家も数多くいる。中でもバラガンは特別な存在。残念ながら彼の建築の実物を見た経験が無く、数年前に東京のワタリウムで開かれた展覧会で、有名な彼の自邸の一部を再



(上・下)バラガン設計『ヒラルディ邸』
(1978年メキシコ) 写真提供／下記※

※「世界建築巡り：ヒラルディ邸」より引用
<https://architecture-tour.com/world/mexico/casa-gilardi/>

現したセットを見る機会があり、感慨に浸った思い出があるだけなのだが、彼の建築の魅力は何と言ってもメキシコ人ならではの色彩豊かな視覚的な美と、一方で決して軽薄にならない禁欲的でミニマルな厳しい美が釣り合っている所だろうか。私の夢の一つはいつか実際に、バラガンの建築をこの目で見るということである。

他にもジェームス・タレル

(James Turrell)とか内藤礼、川久保玲(服飾デザイナー)など、尊敬する芸術家は沢山居るけれど、それについてはまた別の機会に…。

第77回

一宮市美術展

11月14日(木)～17日(日)まで、一宮スポーツ文化センターで「第77回一宮市美術展」が開催されました。

市内を中心に近隣市町村や県外からも多数作品が寄せられ、審査の結果、入賞となった174作品をはじめ467作品が展示されました。

期間中は、約4,000名の方々が来場され、作者の熱い思いが詰まった作品を熱心に鑑賞されていました。また、金曜日は終了時間が午後7時まで延長され、洋画・書・写真部門の種目別解説も行われました。お仕事帰りの方やお子さん連れのご家族などたくさんの方が来場されていました。解説に来場されていた方々はとても熱心に解説に耳を傾けておられました。

市長賞受賞作品は一宮市博物館で行われた「2019一宮市現代作家美術秀選展」(11月30日(土)～12月15日(日))でも展示されました。

市長賞を受賞された方は次のとおりです。なお、同一賞内での掲載順は順不同です。(敬称略)

市長賞

日本画	原田 功
洋画	井村 隆美
洋画	小澤 富美子
洋画	山下 ほたる
彫刻立体	川上 堯由
工芸	鈴木 博司
デザイン	内藤 啓善
書	濱田 幽翠
書	山口 如泉
書	渡辺 湖風
写真	岡田 忠夫



デザイン部門解説
(解説: 鵜飼のはらさん)

文化講演会

【会場】一宮市尾西市民会館

人生を楽しんだ偉人・奇人

作家 荒俣 宏 さん



10月19日(土)に開催しました講演会の一部をご紹介します。

今回は奇人のほうに力点をおきたいと思います。奇人の生き方ってというのは、やっぱり人生のひとつの選択肢じゃないかと思うんです。

尾張地域は実は奇人の大生産地です。愛知県には趣味人が非常に多かった。こういう人たちがひっくるめて数寄者と呼んでいました。

平安の頃は和歌や連歌を作る人たちが数寄者だったんです。一般的な生活、畑を耕したりするのはなく、和歌を詠んだり楽しんでいった人たち、あの人たちは好きなことやってるよねって。ただし、「好き」ではなく、「数寄」ですね。ちょっと変わってるんじゃないかっていうニュアンスがあった数寄者。そのうちに、好きなことをやってる人たちが、数寄者になって、奇

人という意味になりました。

奇人の文化って今でもあります。僕はそう考えています。今、ゲームやアニメが流行っていて、私たちが子どもたちを見て、そんなことをやってろくなもんにならないぞって。でも、実はそれが数寄者かもしれないです。そして、本当の数寄者の子どもたちがいろんな形で何かに目覚めたとき、すごいパワーを発揮できるんじゃないかと思っています。是非そういうことをやり始めている子どもがいたら、ちょっと関心をもってあげるといいと思います。今、現に小学生はスポーツでものすごいことになっている。外国と対等にやっていますよね。あとは文化のほうで出来る余地、こんなに長く培ってきた奇人の文化がある日本ができないことはないと思いますので、がんばってほしいなと思っています。

4回 芸術祭

「第74回 一宮市芸術祭」を
9月～12月に市内各所で開催しました。
各団体の行事の様子をご紹介します。
次号も引き続き掲載予定です。

美術部

2019一宮写真協会選抜写真展



8月8日(木)～8月18日(日)

第12回三美会展



9月3日(火)～8(日)

第16回尾西展



9月11日(水)～16日(月・祝)

水絵の会展



9月18日(水)～22日(日)

第55回麗筆会展



9月20日(金)～22日(日)

手つむぎ・染め・織り展



9月25日(水)～29日(日)

水彩画アクアマリン展



10月1日(火)～6日(日)

土筆の会展



10月3日(木)～6日(日)

第21回新作能狂言面作品展



10月5日(土)～6日(日)

花畑スケッチブック展



10月10日(木)～23日(水)

第15回あさみの会絵画展



10月10日(木)～13日(日)

第35回一面会 能・狂言面作品展



11月7日(木)～10日(日)

一宮市

文学部

俳句大会



11月3日(日・祝)

狂俳大会



10月19日(土)

一宮市尾西俳句大会



10月14日(月・祝)

音楽部

一宮シティ合奏団第26回定期演奏会



10月20日(日)

第47回一宮音楽家協会定期演奏会



10月27日(日)

一宮現代詩祭



11月10日(日)

一宮吟剣詩舞道大会



11月3日(日・祝)

芸能部

第62回合同舞踊公演



11月3日(日・祝)

2019
いちのみや文芸

一宮市芸術文化協会

『いちのみや文芸』
第48集を
刊行いたしました

10月19日(土)に『いちのみや文芸』第48集を発刊しました。
随想・随筆、現代詩、漢詩、
短歌、俳句、川柳、狂俳の7
部門あわせて301名の方か
ら寄せられた2,324作品
を掲載しています。

1冊800円で一宮市役所
本庁舎4階(一宮市教育委員
会生涯学習課)にて販売して
います。



「祈る」

中村 薫

〔一宮市芸術文化協会加入団体の催し〕

『市民俳句教室』

【問合せ先 一宮市市民俳句教室】

☎(73) 5504

日時▼12月22日(日)・1月26日(日)

2月23日(日)・3月22日(日)

午後1時〜

会場▼一宮スポーツ文化センター

参加料▼無料

申込み▼当日直接会場

『市民川柳教室』

【問合せ先 一宮川柳社】

☎(44) 7598

日時▼12月22日(日)・1月26日(日)

2月23日(日)・3月22日(日)

午後1時〜

会場▼一宮スポーツ文化センター
参加料▼無料
申込み▼当日直接会場

『瀟聲會定例会』

【問合せ先 一宮漢詩瀟聲會】

☎(78) 7953

日時▼12月28日(土)・1月25日(土)

2月22日(土) 午前10時〜

会場▼中央図書館

参加料▼月2、000円

申込み▼当日直接会場

『市民短歌教室』

【問合せ先 真清短歌会】

☎(51) 3570

日時▼1月12日(日)・2月9日(日)

3月8日(日) 午後1時〜

会場▼一宮スポーツ文化センター

参加料▼無料
申込み▼当日直接会場

『狂俳月例会』

【問合せ先 一宮狂俳壇連盟】

☎(78) 5002

日時▼1月11日(土)・2月8日(土)

3月14日(土) 午後1時〜

会場▼葉栗公民館(1月は木曾

川体育館)

参加料▼無料

『瀟聲會作詩教室』

【問合せ先 一宮漢詩瀟聲會】

☎(78) 7953

日時▼1月7日(火)・2月4日(火)

3月3日(火) 午前10時〜

会場▼中央図書館

参加料▼年3、000円

申込み▼当日直接会場

『新年短歌会』

【問合せ先 真清短歌会】

☎(51) 3570

日時▼1月26日(日) 午後1時〜

会場▼一宮スポーツ文化センター

内容▼どなたでも(大会に先立

ち1月10日(金)までにハガ

キにて雑詠一首提出)。見

学無料

参加料▼500円
申込み▼当日直接会場

『令和元年度(公社)中部日本書道会一宮支部講演会』

【問合せ先 (公社)中部日本書道会一宮支部】

☎0900813010713

日時▼2月24日(月・振休)

午後4時〜5時30分

会場▼一宮スポーツ文化センター

講師▼名古屋経済大学教授 四辻秀記先生

演題▼「平安時代のかの美」

入場料▼無料(一般聴講歓迎します)

『県文化協会連合会の催し』

第44回 愛知県文連美術展

会期▼12月24日(火)〜1月5日(日)

(12月28日(土)〜1月3日(金)は除く)

午前10時〜午後6時

(27日は午後8時まで、5

日は午後4時まで)いず

れも入場は閉館の30分前

まで

会場▼愛知県美術館ギャラリー

入場料▼500円(前売400円)

高校生以下無料

※生涯学習課で前売りしています。

【題 字】武 山 翠 屋
【編集・発行】一宮市芸術文化協会

【連絡先】一宮市芸術文化協会事務局(市教育委員会生涯学習課内)
〒491-8501 愛知県一宮市本町2丁目5番6号
TEL 0586-85-7075 / FAX 0586-73-9213